

キリストの恵み、神の愛 聖霊の交わりがある教会

II コリント13章1～13節

2021年10月31日

松田 基子 師

教会とは、イエス・キリストを信じる者が、キリストを頭として、互いはキリストの身体の部分、部分に組み合わされたことを、信じる**信仰共同体**です。その皆に共通することは、生まれながらに自己中心で、神様に背き、罪を重ねてきた人生の直中で、イエス・キリストに出会い、キリストが、

『**全人類を罪の滅びから救いたい**』

と、神の子の位を捨てて、人として生まれ、その身に全人類の罪を引き受け、身代わりの十字架に架かって、

『**罪を贖って下さった事を知って、**』

イエス・キリストを救い主と受け入れ、

『**信じて、罪を赦された者**』であることです。

では、キリスト者は、イエス・キリストを信じたなら、もう、罪を犯さなくなるのでしょうか。そうではありません。ところで、永い間の生活習慣から、生活習慣病が生まれます。そのように成ってしまった体質を、健康な身体に戻す体質改善には、健康回復のために、心掛けなければならない事を守り、永い時間が掛かります。失敗する人も沢山います。信仰の体質改善は、イエス・キリストの**生き方に似ていく、聖く化せられる、聖化**です。生活習慣病からの体質改善に、多くの人が失敗する以上に、魂の体質改善である聖化は、イエス様に繋がり、聖霊に助けられて、実を結んで行くと言うものですから、失敗を繰り返しながらの戦いです。失敗の**原因**は、信仰も**自己中心の信仰**になってしまうことです。

そのために教会内で争いが起こり、分裂してしまうという事が起こり得るのです。そのような事態を一番悲しまれるのは、イエス様ですが、真の牧会者はそのような信徒さん達が、もう一度初めの愛に、キリストに結ばれた喜びに戻るために、

涙を流し、祈り、労します。使徒パウロが真にそのような伝道者でありました。使徒パウロは、まだ福音が伝えられていなかったコリントに、宣教に向かいましたが、ユダヤ教からの迫害を受け、様々な困難に見舞われながらも、コリントに教会を建て上げました。

また、信徒さん達を訓練しました。その後、信仰の成長を長老たちに託して、次の伝道計画に進みましたが、パウロが去った後、パウロが苦勞して建てた教会に、外見も立派、話しも上手い巡回教師がやって来ました。彼はその風貌と、話術の巧みさで、コリント教会の人々を引きつけ、教会に更に人々が集まって来ると、コリント教会を自分のものにしようと、考えました。コリント教会内にも、巡回教師追随者が興りました。彼らは、巡回教師の言う事は何でも OK でした。

巡回教師は、コリント教会を自分のものにするためには、創設者のパウロが邪魔でした。教会員の好意を自分のものに引きつけるために、パウロ非難を始めたのです。すると、巡回教師追随者は、この人に同調して、教会の中に分派や対立が生まれました。パウロはコリントの信徒への手紙 I を書いて、信仰の導きを与えましたが、同調者たちは反って反発しました。パウロは誤解を解くために、コリント教会を訪ねましたが、彼らの反発は、更に強いもので、パウロはやむなくエフェソに戻り、そこから切々と彼らの救いが全うされる事を願って、後代

『**涙の書簡**』

と呼ばれている手紙を書いて送りました。それでもパウロは尚、心配で成りません。そこで、テトスにコリント教会に行って、信仰の導きを与えると共に、様子を見てくるように頼み、送り出しました。

パウロは、マケドニアの教会で、テトスの帰りを待ちました。やがて、パウロのもとに、テトスが帰って来ると、

『パウロの涙の書簡によって、悔い改めた人々が起こったこと、また、コリントの人々が

パウロに会いたがっている』
との報告を受けました。パウロはそこで、コリント教会にいく事を決心したのでした。でも、行く前にパウロに言わせれば、偽使徒である、巡回教師と、その同調者の、パウロに対する非難に対して弁明する必要を感じました。そこで書いたのが、コリントの信徒への手紙Ⅱです。

今朝は、その最後の13章の手紙の纏めの部分です。13章1節に、パウロは、

「わたしがあなたがたのところへ行くのは、
これで3度目です。」

と言っています。律法には、

「2人ないし3人の証人の証言で
物事は確定する」

と記されています。パウロは3度目の訪問の意味の重さ、それは

『罪を確定する』と、
宣言しているのです。敵対者達はパウロを、
『弱腰だ』

と非難しました。しかし、パウロは彼らに、

『悔い改めの機会を与えよう』

と、2度目の訪問の時は、彼らを断罪しなかったのです。でも、三度目に行く今度こそ、

「そちらに行ったら、容赦しません。」

と厳しい警告を与えています。その理由として3節に、

「なぜなら、あなたがたはキリストがわたし
によって、語っておられる証拠を求めている
からです。キリストはあなた方に対しては、
弱い方ではなく、あなたがたの間で強い
方です。」

と言っています。

イエス様は人を愛する故に、弱さを現されました。パウロはそのイエス様の心に生きようと相手の心を思いやって、強い態度には出ませんでした。そこで彼らの目をイエス様に向けさせました。4節に、

「キリストは、弱さのゆえに十字架につけられ
ましたが、神の力によって生きておられる
のです。」と言っています。

イエス・キリストは神の御子として、絶対的な権威と力を持っておられました。しかし、罪に汚れ、滅びに引きずられて罪から立ち上がることの出来ない、弱り切った人類を救い、助けるために、イエス様は、神の子の、権威と力を捨て、人の子となって肉体を纏(まと)い、その身に全人類の罪を引き受けて、十字架に架られました。十字架から飛び降りる力も捨てて、人間の弱さに徹して、十字架の死を全うされました。その事によって、神様はイエス様が、人類の罪を贖われたことの証明に、イエス様に、神の子の権威と力を回復してイエス様を死から、3日目に復活させられました。

復活されたイエス様は、永遠の世界に戻られ、神の右の座に着かれ、神の権威と力を帯びて、今も働いておられるのです。パウロの願いは、そのイエス様の生き方に似ることでした。そこで、4節後半に、

「わたしたちもキリストに結ばれた者として
弱い者ですが、しかし、あなたがたに
対しては、神の力によってキリストと共に
生きています。」

と言っています。パウロは、自分を罪の滅びから救うために、徹底的に、人の弱さを負って下さったイエス様を思うと、人々の為に弱さを負うことは、意に介しませんでした。しかし、

「あなたがたに対しては、神の力によって
キリストと共に生きています。」

と言っています。

強いとは言っていない。キリスト者は誰も、イエス・キリストの十字架の贖いによって罪赦され、キリストに結ばれ、神の力によって生かされている者です。その事に於いては、パウロは強いのです。パウロはここに、キリスト者の強さを見出しました。そこでパウロは、敵対者達に対して、5節に、

「信仰を持って生きているかどうか
自分を反省し、自分を吟味しなさい。」

と言っています。

それでは、信仰は何を以て証明されるのでしょうか。パウロは言っています。

「あなたがたは自分自身のことが分からないのですか。イエス・キリストがあなたがたの内におられることが、あなたがたが失格者なら別ですが、・・・」と、

岩波訳では、

「あなた方は自分自身を認識しないのか。即ち、イエス・キリストが、真にあなた方の内におられると言う事を。もし、認識しないのなら、あなた方は失格者である。」

と言っています。

キリスト者とは、真に、この一事に掛かっています。キリストを信じるとは、自分を永遠の滅びから救って下さったキリストに、自分の全存在を委ねることです。委ねるとは、任せることです。任せる為にイエス様に、心の王座に座っていただき、支配していただく事です。イエス様を信じた時、イエス様は、私達の心に入って下さいました。その事を認識しないために、自分の考えに頼って罪を犯すのです。パウロはその事を、

『今一度認識し、自己吟味しなさい。』と言っています。パウロはその意味で、キリストに結ばれた適格者でしたが、7節に、

「わたしたちは、あなたがたがどんな悪も行わないようにと、神に祈っています。それはわたしたちが、適格者だと見なされたいからではなく、たとえ失格者と見えようとも、あなたがたが善を行うためなのです。」

と言っています。

パウロはコリント教会の敵対者達から、『パウロには、正当な福音の伝道者である使徒という資格は与えられていない。あれは失格者だ。』

と批判されていましたが、パウロの願いは、自分がどう評価かされるかが問題ではありませんでした。コリントの信徒さん達が、キリストに結ばれて、キリストの愛に答えて、主が望んでおられる生き方を正しいとして、そのように生きる事が出

来るようになる事でした。

『彼らに真理の道を歩いて欲しい。』それがパウロの切なる願いでした。

そこで8節に、

「わたしたちは、何事も真理に逆らってはできませんが、真理のためならばできます」

と言っています。イエス・キリストは言われました。

「わたしは道であり、真理であり、命である。」

キリスト者はキリストに結ばれることによるのみ、真理に従うことが出来るのです。パウロが歩いて来た、福音宣教の道が、その事を示しています。パウロは、コリント教会の産みの親として、彼らの信仰の成長、即ち聖化を願って、9節に、

「わたしたちは自分が弱くても、あなたがたが強ければ喜びます。あなたがたが完全なものになる事をも、わたしたちは祈っています。」

と言っています。

パウロは信仰に於いて、意志に於いて、行いにおいて、人生のあらゆる面に於いて強い人でした。彼こそは、その強さを誇るに十分な実績を持っていました。しかし、パウロは、強さを誇るのではなく、自分の弱さを誇りました。コリントⅡ11章30節に、

「誇る必要があるなら、私の弱さにかかわる事柄を誇りましょう。」

と言って、彼は何故、弱さを誇るのかについて12章9節で、

「力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ。」

と言っています。

パウロの願いは、コリント教会の信徒さん達が真理に立ち、信仰が強められ、パウロが訪ねた時には、何も非難する事がなく、完全な状態に成っている事でした。彼らが信仰に立って、強くなってくれることでした。10節に、

「遠くにいてこのようなことを書き送るのは、

わたしがそちらに行ったとき、壊すためではなく造り上げるために主がお与えくださった権威によって、厳しい態度をとらなくても済むようにするためです。」

と言っています。

パウロに与えられたキリストからの権威は、壊すためではなく、造りあげるためでしたから、2節で言い渡した

「今度そちらに行ったら、容赦しません。」
と言う状態は避けたいのです。そのために、この手紙を書いたパウロでした。11節に、

「終わりに、兄弟たち、喜びなさい。完全者になりなさい。励まし合いなさい。思いを一つにしなさい。平和を保ちなさい。」
と勧めています。これらは、分裂した教会の中には見られないものばかりです。

しかし、コリント教会も、あの最初の、パウロから福音を聞いて、信仰を告白した時、教会は喜びに溢れていました。キリストに倣いたいという、完全への目標がありました。互いに励まし合い、主にある一致があり、キリストの平和で保たれていました。これらは皆、キリストを信じる教会に、連なったときに与えられたものばかりです。パウロの願いは、彼らとその、初めの愛に帰ることでした。そこに愛と平和の神は共にいて、働いて下さいました。愛と平和の神は、決して彼らから、去られた訳ではありませんが、彼らが受け入れ、従わなかっただけです。当時の教会は、神の家族としての証を、家族同様に、相手の額や肩に口づけをしていたそうです。神の家族は、一教会に留まりません。パウロはマケドニアから、この手紙を書いていたので、彼らの事を全ての聖なる者と呼んで、

「あなたがたによるしくとのことです。」
と交わりの輪を広げています。

最後に、
「主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがた一同と共にあるように」と祝祷を送っています。三位一体の祝福が祈

られています。キリスト者とは、永遠の滅びに向かう以外にないところから、唯、イエス・キリストの恵みによって救い出された者です。その恵みの背後には、父なる神様が、人類を愛し、人類救済の歴史を導いて下さった、神様の愛があります。父なる神、子なる神、聖霊なる神、三位一体の神は、愛の交わりの中に生き、働いて下さいます。

聖霊は神様と人との交わりを可能にし、人と人との交わりに、神様の愛と、キリストの恵みを注ぎ、聖めて下さいます。教会は、キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わり無しに、立ちゆく事は出来ません。また、それが得られる所が教会です。私達の教会も、何時どこから、何が起こってくるか、分かりません。百年の歴史には、様々な事が起こりましたが、先達たちは、キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりに立ち帰りつつ、この教会を守り続けてくれました。私達もこの祝福をしっかり握って、信仰生活を歩みましょう。聖霊によって、神の家族としての交わりが聖められ、更に成長する教会となり、主の栄光を表してまいりましょう。

お祈りを致します。憐れみ深い天の父なる神様、私達はキリストの御救いを受け、主の体なる教会に繋がりながら、なお、自己中心の信仰に生きる、この罪をお許してください。

現実には、救われた罪人の集まりとして、色々な問題は起きて来ますけれども、互いに悔い改めつつ、どんな時も、キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりによって、一つとされ、その恵みに生かされる教会として下さい。

尊い救い主イエス・キリストの
お名前によってお祈りを致します。

アーメン。